


 ざいそう

## 溪流釣りから垣間見る「生命」

齋藤隆之



溪流釣りを始めて、20年になる。胴長靴、タモ、魚籠、えさ箱、帽子、さらにはザックを背負う姿は、お世辞にもカッコイイとは言えまい。解禁当初、浜松から釣り場に向かう街道では、スキーやスノーボードを積んだ車に出会うから、この時期、山は冬である。溪流釣りでは、時には腰まで水に浸かって、流れを遡上しなければならない。足場は滑りやすく、流れはきつい。崖をよじ登ることさえある。暖を求めて着膨れすれば、動きが鈍り危険であるから、薄着の身軽さを選ぶ。ひざ程度まで浸かっている、身体が芯から冷えてくる。冷えるから頻りに小用を足すはめになるが、これが実にかっこ悪い。さおをたたみ、魚籠、タモやザックを岩場に置き、サスペンダーを肩からはずし、胴長靴をひざまで下げる。溪に人気はないが、こんな姿を娘が見たら、「もう、かっこ悪い。おとうさんとは口もききたくないわ!」と非難されるだろう。

シーズン最初の第一投には、いつも緊張する。厳しい冬を乗り越えたヤマメと出会うことができるか、どんな手応えがあるのか、狙ったポイントは正しいか、流れの読みは間違っていないか、と多くのことが頭を駆け巡る。

筆者は、釣りは溪流釣りだけである。他の釣りはしない、というより興味が湧かない。なぜだろう、溪に一人で分け入る単独釣行である。これがいい。一人で自然と対峙することが楽しい。次に、ヤマメは簡単には釣れない。その難しさゆえに、釣り上げるまでのプロセスが楽しめる。釣り上げたヤマメの大きさや数を誇るのではなく、目的に到達するまでのプロセスそのものが楽しい。第3に、2、3投で、次のポイントへと移動し、遡上していくという、動の釣りである。船体が40度も傾く時化のなかですら船酔いなどしたことはないが、船釣りは好きになれない。自由度がないからである。こんな話を妻にすると「やんちゃな蝉取り坊やが、少し遠くまで出かけるようになっただけじゃないかしら?」と言われそうである。反論はできない。

さて、始めた頃は、何度行っても、釣れない。ハウツウ本を何冊も買い込んで勉強するが、全くだめである。そんな時に、岩波新書「イワナの謎を追う」(石城謙吉著)に出会う。釣りの本ではなく、イワナの生

態を科学的に解き明かした内容である。ヤマメはイワナと同種であるし、棲息域もほとんど同じであるから、イワナをヤマメに置き換えて読むと、その生態が理解できた。理解が深まるとともに、釣れるようになった。さらに、工夫と観察、釣れた理由(流れや川の状況など)とヤマメの生態との関係などを考え、釣り方にさらに改良を加える。こうして、自分で考え、自分なりの技法を作ることによって、数も型も格段と良くなった。研究もそうであるが、ある対象を自分の物とするには、人まねではなく、その本質を自分で掴み取ることが必要と思われる。遠回りしても、懸命に本質を見ようとすれば、何か自分だけのものが築き上げられていく。その過程で、いろいろな成果が出てくるのではないだろうか?

先の新書によれば、イワナやヤマメの降海率は、緯度の上昇とともに上がる。彼らは、外敵は少ないが餌に乏しい、冷たい川の最上流で孵化し、2年間は溪に留まる。餌の乏しさは、釣ったヤマメを塩焼きにした時に、良く分かる。秋刀魚を焼くときのような煙は全く発生しないからである。春先に、か弱い一群が一斉に川を下る。見るからに弱々しく、敵だらけの海で生き延びることができるのか、なぜ、そんな危険を冒すのだと引き止めたくなる。彼らは、溪流での仲間同士の生存競争に負けたもの達である。溪で食べることができず、川を下るのである。数年後、見違えるほど大きく、逞しくなった彼らが遡上し、子孫を残す。地球上の水の97.5%は海水で、川の水は0.0001%しかない。餌は豊富であるが外敵だらけの海、外敵はないが冷たく餌のない溪流、この隔たった環境に棲み分けることにより、確実に子孫を残すことができる。見事な生存戦略(知恵)である。これこそが、生きることの本質ではなからうか。知恵の限りを尽くし、自分なりの生き方を探し出す。シーズン最初のヤマメに、いつも生きることの感動を覚える。

納竿し、慎重に川を下り、崖を上る。妻が一式包んでくれた暖かい着替え(靴下からセーターまで)に袖を通す。やんちゃな蝉取り小僧は、これからも一生懸命に生きていこう。

—さいとう たかゆき 静岡大学工学部機械工学科教授—